



母屋2階の蚕室へ機械を使って桑の葉を持ち上げる。取材時、蚕室の中は30℃を超えていたが、蚕が桑を食べる「サーッ」という音が部屋中に聞こえていた。



■碓氷製糸と安中の養蚕

碓氷製糸には、本県をはじめ全国から繭が運ばれてきます。昨年、碓氷製糸に収められた繭は約25トン、そのうち約6割が本県産でした。

上毛かるたで「繭と生糸は日本一」とうたわれるように、群馬県は古くから養蚕農家の戸数や生産量などで全国一を誇っています。その中でも本市の繭生産量は長年、県内トップクラスです。しかし、外国産の安い生糸や絹製品の輸入増や絹需要の減少により、蚕糸業の規模は激減しています。県などの資料によると、昭和40(1965)年の県内の養蚕農家は73,097戸、それが令和6年には53戸、市内ではわずか4戸まで減ってしまいました。

7月上旬のお昼過ぎ、松井田町細野地区の養蚕農家、上原一夫さんを訪ねると、ちょうど「桑くれ」の最中でした。朝に与えた桑の葉を食べつくし、枝だけが残っていました。その上に、さらに新しい桑を置いていきます。雨でも、台風の日でも朝と晩に畑で桑を取り、蚕が繭を作り始めるまでの約2週間、毎日3回「桑くれ」を続けるそうです。

	昭和40年	令和6年
群馬県	73,097戸	53戸
安中市	4,312戸	4戸

養蚕農家の戸数比較

■288社から2社

収穫した繭は農協などに出荷された後、碓氷製糸に運ばれ乾燥・貯蔵されます。工場内には、安中市発祥の組合製糸「碓氷社」をルーツにもつグンサンや富岡製糸場を所有していた片倉、カネボウ、グンゼなどかつて全国で操業し、取引のあった工場の繭袋が展示されています。

農水省などの資料によると、国内の器械製糸工場数は昭和26(1951)年のピーク時には288社ありましたが年々減り続け、平成17年には山形県の工場と碓氷製糸の2社のみになってしまいました。

■「日本で最後の碓氷製糸」

碓氷製糸が扱うのは国産の繭のみ。その理由は、国内の養蚕農家を守るためです。かつて40万トン(昭和5年)生産されていた繭も、今やわずか38トン(令和6年)。その7割を買い受ける碓氷製糸がなくなったら、日本の蚕糸業はどうなるのでしょうか。

「日本で最初の富岡製糸」の対となる、まさに「日本で最後の碓氷製糸」ともいえる存在なのではないでしょうか。